

私立短期大学図書館協議会

会報

Bulletin of Junior College Library Association

編集者：菅原・川井

発行者：鈴木英二

発行所：私立短期大学図書館協議会

〒215 川崎市麻生区東百合丘

調布学園女子短期大学図書館

電話 (044-966-9211)

1988. 3. No. 22

私立短期大学図書館協議会

創立10周年記念特集号

短図協の発足と活動

私立短期大学図書館協議会会長 鈴木英二

短図協（私立短期大学図書館協議会）は、昨年創立満十年を迎えた。短図協の発足は昭和52年で、創立総会は昭和52年度全国図書館大会（大阪）の際、建設保証ビルの会議室で開催された。同年9月29日のことであった。どんな組織でも、それが生まれるのにはそれなりの背景があり、創立にかかわった人びの苦労があるものである。

短大の発足は昭和25年であり、もちろん図書館活動も同時に始まったことはいまでもないが、しばらくの間館界での存在の影は薄く、発言力も大きくはなかった。全国図書館大会に初めて短大会が持たれたのは昭和35年からであり、日図協大学図書館部会の短大図書館分科会として認められたのは、更に5年を経過した昭和40年のことであった。昭和46年には公立短大図書館協議会が発足し、昭和51年度日図協総会では、数年来の懸案であった短大図書館部会の大学図書館部会からの独立が認められるに至った。こうして短大図書館は、漸く館界に独自の地位を確立するに至ったのであるが、私立短大図書館は短大会の中であってその母体となるべき全国組織を持っていなかった。当時、日短協や東短協内には図書館研究委員会があったが、これは直接日図協の組織に結びつく性格のものではなかった。

短大図書館部会の発足によって、私立短大図書館の全国組織結成の世論がもりあがり、具体的な活動が展開されるに至ったのである。当時、短大図書館界にあって指導的立場に立ち、短大会の発足にあたっては副部長に就任された安部登巳氏（当時東京女子短大図書館）は、全国の有志と相謀り、もり・きよし先生の御指導をいただきながら組織づくりをリードし、昭和52年9月の創立総会の開催にこぎつけたのであった。

発足当初の役員は、もり・きよし会長のもとに、地区選出理事には坂本龍三（北海道）、宮城清（東北）、片山喜八郎（関東）、梶田一（中部）、前川和子（近畿）、川崎文策（中・四国）、村上博子（九州）の各氏が、また会長指名理事には安部登巳（常任理事）、岡野盛繁、芝原翠、菅原春雄の各氏がそれぞれ就任した。いずれもその後長く協議会の発展に尽力され、あるいは今もお第一線で活躍されている方ばかりである。事務局は昨年6月まで東京女子短期大学短期大学図書館におかれ、同館の渡辺敏一氏が終始繁雑な事務の一切をとりしきられた。短図協の十年は各期ごとに選出された地区選出理事を中心に展開された地区ごとの活動と、事務局を中心に会長指名による各期理事の献身的な努力とによって支えられてきたもので

ある。もちろんその中心に、常に温和な笑みを浮かべ適時適切な助言を惜しまれなかった、もり・きよし先生の存在があったことを特筆しておきたい。

短図協は、創立早々の12月には会報を創刊し、以後毎年春秋2回の刊行を続け、情報提供と会員相互の連帯強化に資するとともに、昭和55年以来年刊の「短期大学図書館研究」を刊行し、会員の研究発掘に努めた。会員相互の連絡と相互理解のためには昭和60、61年に会員名簿を刊行し、また会員の研究成果を刊行する出版活動も行なっている。「短期大学図書館総覧」(昭54)「同：集計分析編」(昭55)、「図書館員になるには」(昭59)、「資料組織化便覧」(昭58)、「日本十進分類法新訂7版—8版比較表」(昭58)、「言語学・英語学関係基本文献目録」(昭62)などがこれである。乏しい財政の中で、これだけの事業をなしたことは、短図協として誇るに足ることであるが短図協の活動に理解を示され、陰に陽に支援を惜しまれなかった新日本印刷にも心から敬意と謝意を表したい。

また、定期総会は常に研究会を併催したが、これとは別に全国研修会も、重要な本部事業の一つである。特に昭和57年から3年間継続された「マイコンによる図書館業務の処理」には延600名が参加し、短大図書館の機械化に大きな影響を与え、昭和61、62年の「参考業務と書誌」の研修会には全国から延150名余が参加し、実践的な研究に汗を流した。これらの研修活動は、短大図書館のあすを拓く貴重な契機となるものと確信している。

昭和52年創立当初の会員は102校。それが10年後の昨年7月末には約2.6倍の263校の会員を擁するまでに成長した。個々の図書館も、この10年間それぞれに充実、発展の途をたどったことであろう。しかし仔細にみるならば今後に残された問題も山積していることも事実である。これらの問題を解決し、短大図書館、ひいては短大教育の発展に向け、いっそう組織を固め、一致協力して前進を続けたい。

(千葉経済短期大学)

力の結集をめざして

私立短期大学図書館協議会常務理事 安部 登 巳

背景 今ではもうだいぶ色あせた感のある「私立短大図書館改善要項改訂版」が作成発表された頃のことである。

私立短大図書館の関係者が集まって、年1回開催される研修会のテーマを決める会議の席上でのこと、短大図書館でも将来機械化の問題は避けて通れないだろうとかねてから予測を立てていた筆者は、状況を概説し、その前段階として業務の標準化——特にスタッフ・マニュアルを取り上げてはどうか、と提案した。十分に暖め確信をもって提出したテーマであったが、案に相違して賛同を得ることができなかった。役になったのだ。

反対理由が実にふるっている。

- 「一つの例示(のつもりで紹介された事例)が、規範となつては困る……………」
- 「マニュアルは館独自のもの。館事情が違いすぎ参考になるかどうか……………」
- 「公表すべき性質のものでない……………」
- 「共通テーマになじまない……………」などなど。

手許に残る当時の記録から拾ったものだが、あまりのことに「啞然」とあり、あと空白。目前の課題に追われゆとりを持ってない当時の実情は推擦できるが、こうして成長のチャンスをつぶし合っているのかとその時の諦観を今でも残念に思う。

やはり同じ頃のことである。ひとのふりみて何とかやらずで、図書館見学は実益が多いので以前から盛んであった。研修会のあと見学先への移動はバス。そのバスの中でのコミュニケーションの拡がり効果もまた実に有用なのだ。見知らぬ者同志でも隣合って座れば言葉の一つも交わすというもの。

「現職者にとって年1回の研修会では少なすぎない? 地域的な集りでもよいから継続的なBrush-Upの機会を持ちたい……………」

「ひとまかせでない自前の研修会で、そうした点を克服できないものだろうか?……………」と。

今までの研修会の時間外の時などにも聞かれたこうしたことが、思いつきでない切実な強い一本の声となって聞こえてきた。

力を結集しよう それぞれの館種には、他の館種にはない共通の問題点がある。大規模館の集まりに出席するたびに、そこで出される話題・問題点とは無縁のような短大図書館グループは、ある種のもどかしさを感じながらも、無為とを感じる時をしばしば持たざるを得なかった。そのような時期であった。短大図書館グループが、JLAの組織の中で部会として独立したのは、丁度その頃は、日米短大の交流が活発になりつつある時であり、広く海外への視点、将来への展望など巨視的な確かな眼力が結集して、私立短図協組織化へのうねりとなった。

自律性のある真の意味の連帯が欲しい、そして独自の問題の掘り起こしやその解決に向けての方策を皆で考えよう、として私立短図協は創設された。発足当初、多少論議を呼びまた危惧されたこととして、組織のいわば脆弱性が指摘されはした。未熟なこと、資金がない、人手がない、組織率のこと、などなど。さらに、組織の分散

化——弱少の短大図書館グループの中に、いくつもの団体が作られるかのように見えた——につながらないかと。

しかし、それぞれの組織の役割分担をわきまえていた当時の識者たちは、まったく別の観点から楽観していた。短大図書館界の力を結集しようとしてできたのが、短図協であったからである。分散できる程の力を、当時の短大図書館界は持っていなかった。今も、であるが。

私立短図協は、この10年間に予測どおりの成長を遂げたと思う。これもひとえにこの組織の運営に活動に心を寄せられた一人ひとりの熱意の結集の賜物でしょう。不透明な没個性的な時代にあって、人の交わりの温かさを大事にするこの短図協を大切に育てたいと思う。それにつけても、最近の短大図書館界にみられる、力の分散につながりかねないようなわきまを忘れた各組織のあり方について、何とかならないものかと憂慮しているのは、独り筆者のみであろうか。

(聖徳学園短期大学)

私短図協創設期のおもいで

私短図協の10周年に思う

坂本 龍三

私短図協の10周年にふさわしい雅文のなかにまじって駄文を呈するのはいささか気がひける。わたしとしてはそれすらも書くのにふさわしい立場ではないと思っている。できることならば書かずに過したいと思い、だんまりをきめ込んでいたが、熱心な編集担当理事からの督促を受け、駄文を書く破目となった次第である。

もとはといえば、気がついたら私短図協の設立に参加することになっていた。当時、設立発起人の安部豊巳先生に初めてお目にかかり、その熱意と温かい人柄にひかれて、元来、人の先頭にたって何かできるような力を持ち合わせていない私が、先生のお話を拝聴しているうちに、そんなわが儘はゆるされないという気持ちにさせられたのかも知れぬ。

以来、昨年3月までの10年余り、地区理事の末席に列なることになった。この間、初代会長のもり・きよし先生をはじめ歴代の会長、さらには渡辺敏一事務局長の温かいご厚意に甘えながら過してまいりました。

しかし、いかにせん力量不足、とりわけ北海道地区の各加盟館にはいつしかご迷惑をかけていたのではないかと、今になってその不明を反省している。

さいわいにも、昨年4月からは、経験豊富な多くの人材を擁した静修短大図書館に後事を託すことができた。今後は新しい視点にたった活動を推進してゆくことと確信している。

私にとって私短図協にかかわっていた10年の収穫は何といっても沢山の人たちとの出会いと、そこから多くを学ぶことができたことに尽きる。

もり・きよし先生のもとで私短図協の仕事させていただいたことを心から感謝しているし、それが今も私の財産となっている。設立準備にあられた当時の各委員の気持ちも同じであろう。

そして、そのような気持ちが各地区の活動を促進させ、今日の私短図協をつくりあげてきたといえる。

この10年間私短図協はいろいろな成果を世に出している。設立して間もなく、芝原翠氏を中心とした作業がすすめられた『私立短期大学図書館総覧』とその『分析』

を刊行したのを始めとして「会報」「短期大学図書館研究」の続刊、中央・地方における研修会・講演会の開催、近くは東洋英和女学院短大グループによる『言語学・英語学関係基本文献目録』の刊行などの実績をあげてきた。

また、私短図協とは別とはいえ、そのメンバーによってつくられた書誌研究会からは、10年にわたって蓄積してきた『何かお捜しですか』の集大成として『参考調査便覧』が刊行されることになった。同書は、これまで私短図協の活動を支えてきた渡辺敏一氏と彼が全幅の信頼をよせている片山喜八郎氏による渾身の力作である。

これらの成果をみるにつけても、単に、図書館が好きだから、本が好きだからというだけで成し得ることではないような気がする。

10周年にあたって、われわれはこれらの成果にこめられた図書館人たちの情熱の底にあるものを学び、それらをさらに充実させ、新しいものを生み出してゆく責任がありそうな気がするのである。

(北海道武蔵女子短期大学)

創立10周年を迎えて

前川 和子

私立短大図書館の全国的組織が創り出されて、10年経過した事がどんなに素晴らしいことか！若い館員達が、すでに永い年月存在してきた組織だと考えてくれることに誇りを感じます。設立に携わった方々、そして10年間支え続けてこられた理事他役員の皆様、そして我々図書館員。一つの組織が生き生きと存在し続けるのはどんなにか大変な事でしょう。私達の短図協が10周年を迎える事ができた事を、心から喜びあいたいと思います。

10年前、設立に多大の貢献があった方々のお一人、安部登巳先生より近畿の地区理事にとご依頼を受けた時は、本当に驚きました。自分には力などないものと思っていました。でも勧めてくださるからにはやってみようとお引き受け致しました。近畿地区の地区活動は、同僚に支えられ、加盟館の皆様に支えられスタートしました。私立短大図書館の全国的な組織が欲しい、身近に同質の図書館として話しあえ、助けあえる仲間が欲しい、そしてあらゆる面で貧弱だといわれていた短大図書館を質的に向上させたい、というのが私の希望でした。

短図協発足ののおかげで、10年前に比べ私立短大図書館の質は向上したと思います。国学院栃木片山先生達の御努力のパソコンを使った図書館業務処理、各地区の総合目録の出版（近畿地区は87年10月に80年版の全面改訂版

を出版しました！）「短期大学図書館研究」に掲載される研究成果、図書館業務内容紹介、各地区での活発な研修活動など。特に地区活動については、その活動の活発さに感動すら覚えています。

近畿地区の活動をみましても、1年に3回研修会が行われています。（うち1回は図書館見学）何よりも私が素晴らしいと感じてきたことは、近畿地区の理事校を引き継いでくださった方々とその図書館の皆様の活躍ぶりです。早々と引退した大谷短大に続き、帝塚山学院の瀬古輝子氏、平安女学院井上宏二氏、神戸山手八田義一氏、帝塚山高浜洋一氏、そして各々の館員の皆様が、各々すごい力を発揮して近畿地区の基盤をつくり、組織を固め、磨いてくださいました。88年4月から、私の大先輩である大阪女子学園の坂上恵子氏が理事校を引き受けてくださいました。近畿地区には（勿論他の地区にも）図書館員として才能のある方、熱意のある方がたくさん先輩後輩にいらっしやいます。理事校になるには最低3名の館員と他館の支えがなくては大変ですが、もし条件が整えば、是非色々な方に理事校を経験して頂きたい、というのが私の願いです。さあ、新たな未来に向けて、今後も私達の短図協を守り、さらに向上を目指し、利用者に大いに貢献できるよう、頑張っていきたいものです。

(大谷女子短期大学)

短図協の発展を祈って

杉山 敏子

文部省は、昭和61年度から「新高等教育計画」を進めているが、昭和63年度認可新設学部・学科増設校が62年12月18日答申された。短大では10校新設16学科が増加する。昭和25年150校から出発した短期大学は様々な問題をかかえながらも時代の要請に対応しながら今日に到っている。

その中で「短大の図書館」は設置基準の最低値に甘んじ貧しい予算・貧弱な施設・設備、厳しい人員で運営し他方、図書館界の中でも、文部省でも大学図書館レベル扱いはされない状況のもとで、昭和51年11月のJL A全国大会短大部会で私立短大図書館の全国組織結成アピールが行われ、52年9月29日「私立短期大学図書館協議会」が誕生した。以来10年の時を重ねた感慨は深い。何故ならば、この間の変動は実に大きく驚嘆するものがあった。会報No1では加盟館113、年間予算34万円弱であったものが、No21（昭和62、9）では、263館、出版事業特別予算を含めると約380万円とその規模は10倍以上に成長

している。この裏には、もり・きよし会長をはじめとする在京役員、北海道から九州の7地区の委員と彼等を囲む加盟館員1人1人の熱情と努力の結集があったからにはかならない——血の通ったネットワークをつくり、相互協力を活発にして、よい図書館づくりを目指して燃えていた——と私は感じていた。

「私立短期大学図書館総覧 '79」は、こうした初期の基盤を固め零細な中で働く館員の絆を結び強め改善への糸口をつくった。そして「集計・分析編」を1980年7月に出版したが、すべて手作業でやったことが夢のようである。設問作成時には「機械化」が今日のように急速に発達普及することをその頃の私には考えられなかった。それにつけても昭和56年10月JLA全国大会が浦和で開催された時「国学院大学栃木学園図書館の電算化システム」について片山喜八郎先生の講演が短大図書館の機械化への突発口を開き、その時羨望の眼で聞き入っていた館員に希望を与えた第1回短期大学図書館全国研修会（昭和57年5月）へと発展したのである。片山先生の講演「マイクロコンピュータと図書館」と特設のNEC PC8001システムの前で全国から参加した人々が夜9時過ぎまで夢中になって受講していた情景は今でもわすれられない興奮を覚える。その後回を重ね、大阪・北海道と各地区に飛んで行かれた片山先生をはじめプログラム作成に貢献された同校の菊地俊一先生と館員の方々、一切のプロデュースをされた渡辺敏一氏の献身は館務の責を遂行しながらのことゆえ、私共の想像を絶する労苦があったことを思い、特に感謝の意を記したい。

「関東甲信越地区私立短期大学雑誌総合目録」は44館の参加を得て、これも国学院大学栃木学園によって刊行されたことを契機に各地区でも出版された。昭和55年「短期大学図書館研究」が創刊されて私短図協の活動も軌道に乗ることが出来たと言えるであろうか。

この間の喜びといえは、昭和58年9月にもり先生の喜寿祝賀会が行われた事、昨年5月病いに倒れられたが全快される日の近いことを期待したい。そして最後に東海北陸地区の設立時から真摯にお働き下さった愛知淑徳短大の林勇一先生が60年4月3日に急逝されたことを記して、心から御冥福をお祈り申上げる。

時代の流れの中で新しく誕生する短大がある一方で、発展的改組とか様々の理由で廃校していくものがあるが、フェリスの家政科は63年度の募集を停止した。何とも云えない寂寥感を禁じえないが、しかし、なお“ローマは1日にして成らず”を肝に銘じて私短図協の今後の地道な発展を祈る。

(フェリス女学院短期大学)

創立10周年を迎えて

岡野 盛繁

私立短期大学図書館協議会が10周年を迎えたそうで、まことにおめでとうございます。心からお祝いしたいと思います。私などは創立当初に少しお手伝いしただけでこれまで恩恵のみを蒙ってまいりました。理事や幹事などの役員のかたがた、本当にご苦労様です。

今ふりかえて考えてみますと、当時の東京女子大学短大部の安部豊巳先生（現聖徳学園短期大学）が、この協議会の設立にどれほど苦心なさっておられたか、を痛切に感じております。恐らく、協議会規約（案）や設立準備委員会などの下準備も安部先生が中心となって書かれ、また奔走されたものと思います。

大阪で私立短期大学図書館協議会の設立総会が開かれたのは昭和52年9月29日のことで、たしかその日は雨が降っていたことを思い出します。それにもかかわらず、非常に多くの出席者があり、まさに胸躍る感動の一日でありました。会長をお引受け下さった、もり・きよし先生、各地区の理事になられた諸先生など関係者一同で共に喜び合ったものです。

はからずも私は翌53年には、さてこれから頑張るぞ、という大事な時期に辞任するという羽目になってしまいその当時の役員の皆様には大変申し訳なく思っております。

今後の短図協の活動ということですが、やはり多くの短大が関心を持ち、直面させられているのは機械化のことであると思います。ネットワーク化の問題も含めて、各短大の実情を知りたいので、アンケートなどにより、機械化関係も含めた「私立短期大学図書館総覧」の改訂版を是非作っていただけないでしょうか。

また、私立大学図書館協会などが行なっている、各業務についての分科会（勉強会）活動なども積極的に採りあげていただきたいと思います。このような研究会活動により若い館員同士の横のつながりも強まることを期待できるでしょうから。さらに、地区によってはすでに活発に行なわれているようですが、同じ地域での相互利用協定などもこれからは重要な役割を果たすことになると思われます。短図協が音頭をとって、それぞれの地区で、まず短大だけでも相互利用の環を広げることができるとを願っております。

(東横学園女子短期大学)

人びとの聲あと——私短図協10年史余録——

前事務局理事 渡 辺 敏 一

はじめに

本協議会は、多くの人々の夢や希いを込めて産声をあげ、本年で10周年を迎えた。しかし、実績もなく力も乏しい組織が独り立ちをし、多少なりとも会員館のために役立つ存在となるためには、すくなくからぬ時間と多くの人々の努力が必要であった。ところで一つの組織の歴史とは、それに関わった人々の営みが織りなされて出来た歴史でもある。本会の歩みについての公的記録は、既に会報をはじめとする諸々の資料に存在するが、これらの記録からは、このような人々の営みは見えてこない。筆者は職責上、創設以来の歩みについて、本部を中心にその全体を俯瞰できる立場にあった。ついては「10年間にわたる本会の足跡を記してほしい」という本紙編集部からの依頼にたいして、それに関わった人々の営みを見つめなおす視点からまとめてみたいとおもう。なぜなら、その営みを温もりと立体感のある風景として記録することこそが、努力された方々に会として配慮すべき最小限の誠意と考えるからである。

本協議会の活動は、全国7地区に存在する地区協議会が独自に展開するものと、本部が展開するものとに大別される。本来的には、前者が本会の活動の中心をなす。しかしその営みの詳細は、この特集の中で適任の方々が記されているため、ここでは本部の活動に限定したい。

本部関係の活動は(1)組織運営のための諸会議、(2)機関紙・紀要等の刊行、(3)研修活動、(4)出版活動、(5)地区協議会への援助、(6)図書館関係団体との協力、などにわかる。これらの個々について、創立から年次別にその概観をまとめると、下記の通りである。

組織運営のための会議等

本部管轄の諸会議には、総会・理事会・役員会があり、それぞれの機能するところは「規約」に定められた通りである。その活動の詳細は、既に本紙に報告されているのでここでは割愛する。ところで、組織のありようは中心となる人物次第で大きく変わる。その見識の高さはもとより、優れた人格者でもある森清現名誉会長に、創設以来の7年間にわたり会長を続けていただいたことは、本会にとってなによりも幸福なことだった。先生の存在が役員を心をついにされ、上記の諸会議でのまとまりを

もたらし、さらには後述のような犠牲と奉仕の営みをも導き出してこられてきた。そしてこのことは、現在の鈴木英二会長（千葉経済短大図書館）にもそのままあてはまることである。つくづく本会は恵まれているとの思いが深い。また会長といえば、森会長辞任後の1年間を会長代行され、鈴木現会長の実現にも尽力された有岡章前常任理事（鶴見大学女子短大部図書館）の努力も忘れることができない。さらに会議に関わることとしては、本会が発足して間もなく、事情により九州の地へ赴かれた安部豊巳現常任理事（聖徳学園短大）が、諸会議の度に、必死に飛行機で駆けつけられたことを思い出す。その出費は無論のこと、赴任したばかりの状況のなかで頻々と上京することには、余人には伺いしれない大きな苦労があったはずである。組織に関わる我々へのなによりの手本であった。なお、これらの諸会議の開催にともなう企画・準備・運営などについては、その職責上、筆者が中心的に関与してきた。

機関紙・紀要類の刊行

1. 『会報』

本会の機関紙である『会報』は、1977年12月に創刊され、ほぼ年2回の頻度で刊行を続けた。今日までに22号を数える。本紙は毎号600部を印刷し、会員館・役員館・図書館関係団体等に無料配布を行ってきた。この間、1号から20号までの編集は、菅原春雄現理事（文教大学女子短大部）が担当し、21号からは川井依玖子現理事（東京文化短大図書館）が担当している。とりわけ菅原氏は、この10年の間、単身で刊行に力を尽くしてきた。何事によらず、努力を持続することは容易ではない。会としてはこの機会に、その労を多し感謝の意を表すべきであろう。

2. 『短期大学図書館研究』

本会の紀要としての『短期大学図書館研究』は1980年3月に創刊され、ほぼ年1回の頻度で刊行を続け、今日までに7号を数える。本誌は毎号500部を印刷し、加盟館・理事館・図書館関係団体などへ無料配布するほか、加盟館以外に対しては有料頒布を行ってきた。創刊号は、宮島敬久現監査（共立女子短大図書館）が編集を担当され、企画・編集にともなう諸々の事項について詳細なと

りきめを作り、継続刊行のための基盤を整備した。2号は芝原翠現顧問（前理事：東洋英和女学院短大図書館）、3・4号は有岡章前会長代行と高橋道枝前理事（鶴見大学女子短大部図書館）、5・6・7号は網本正巳現理事（調布学園女子短大図書館）が担当された。本誌の企画・編集に関する仕事は多種多量にわたるため、担当者の負担はかなりのものとなる。このことは、各大学の紀要の発行を例にとれば想像がつく。それを各号とも、担当者が一人で対処してきた。無論、それぞれの所属図書館の勤務時間外の仕事として、よくぞ刊行を続けてこれたという感慨が深い。また本誌について忘れられないことに、刊行経費の工面のことがある。本会の財政は会費収入でまかなわれるが、それを地区協議会と本部ではほぼ半々に分けあう。そのため本部の財政は、年次総大会や理事会等の諸会議の開催、及び会報や加盟館名簿の刊行など、組織の基盤に関わる活動だけで手一杯となる。したがって会費収入から刊行経費を捻出することは不可能なため、各号ともその販売収入と広告収入とでまかかってきた。因に最新刊の7号の場合、その刊行経費約85万円は、販売収入（約27万円）と広告収入（約63万円）でまかない、会費からは全く充当していない。これは組織運営上は異常なことであり、やはり受益者負担のかたちで対応することが望ましい。しかし財政が乏しいから活動ができない、だから会が発展しないという悪循環は、どこかで断ち切らなければならなかった。そのための非常手段がこの方法であった。しかし毎号についてこれだけの広告収入を得ることは、本協議会の力量では不可能なことであった。そのため、本部役員が個人的に培ってきた人脈等に頼って対処せざるを得なかった。そしてその任は、森清現名誉会長と宮島敬久現監査、そして筆者の3人が主として努力を重ねてきた。とりわけ宮島監査は、これまでの広告収入全体の65%強（総額で約200数十万円）を一人で負担してこられた。この事実は、同氏の助力なしに本誌の刊行が不可能だったことを物語っている。依頼事とは全てそうであるように、ただ頭を下げて頼めば叶えられるというものではない。依頼主と依頼先との間に、人間としての信頼関係や恩義の関係が不可欠である。このような関係に厚みや拡がりをもつほど、いわゆる“力がある”ことにつながるわけだが、その“力”の大小は、それまでの個々人の生きかたで決まる。このことを思いやるとき、本会は同氏のこれまでの人生そのものによって扶けられ支えられてきたといえよう。このことの意味はきわめて重たい。会全体が永く銘記しておくべきことであろう。

3. 『加盟館名簿』

1985年には同名簿の昭和60年版を、1986年には昭和61年版を刊行し、加盟館へ無料配布した。従来は各地区毎に独自の名簿を作成していたが、全体の名簿は存在しなかった。調査は各地区理事館が担当した。また経費節減のため、筆者がワープロ入力による版作りを行った。その甲斐あって、刊行経費は約20万円程と極めて安かった。その後、理事会の意向により以後の刊行を中止した。

研修活動

本会への会員館からの要望としては、研修会の開催を望む声が最も多い。この要望に応えるべく、1982年には「第1回短大図書館全国研修会」を開催した。既に会報などに報告された通り、図書館運営の合理化と省力化について、機械化による方法とよらない方法の両面から掘り下げた。機械化によらない方法では、芝原翠現顧問と杉山敏子前幹事（フェリス女学院短大図書館）が中心にまとめた整理業務の実態調査をもとに、森清現名誉会長による講演やパネルディスカッションを展開し、多様な問題の明確化と解決の方途の追及をした。機械化による方法では、当時としては最新鋭のパソコンを22システムを準備し、片山喜八郎現顧問と菊地俊一氏及び佐藤郁子氏（3氏とも国学院大学栃木学園図書館）の指導で、コンピュータによる図書館業務処理の実習を行った。これはわが国の図書館史上はじめての試みであった。しかし当時は、パソコン自体がまだ黎明期にあったため、数台程度の規模ならまだしも、これだけの台数を揃えた研修会場は東京に存在せず、メーカーから機械を借りて対応する以外に術はなかった。が、パソコンとはいってもこれだけの台数になると数千万円もの額になるため、本会のような小さな組織などメーカーは相手にしてくれなかった。かかる状況の中で本会が途方に暮れていたとき、それを可能ならしめたのが片山喜八郎現顧問であった。氏は個人的に培ってきた人間関係により日本電気と再度交渉され、これだけ多数のパソコンの無償借出と、更には機器のセッティング・調整等のための専門家（4名）の派遣を実現してこられた。しかも同社への恩義に対して、本会は何ら応える力をもっていないため、氏はその恩義を返すための営みをも個人的に引き受けられ処理してきた。申すまでもなく、氏にとっては何ら名誉や利益にならないことのために、である。しかも氏の尽力はこれだけに止まらず、翌年（第2回）と翌々年（第3回）の同研修会には、さらにその負担を大きくしていった。この二つの研修会は、前述の「第1回研修会」の参加者の強い要望により、機械化による方法のみを充実・発展させるかたちで開かれた。但しこの研修内容については本会全体がま

まったく無力なため、日本で最先端の実践を進めている国学院大学栃木学園図書館にすべてを依存せざるをえなかった。そのため、一方では気の遠くなるような努力を強いられる図書館システムの開発に、他方では研修内容の企画・準備として炎暑の中での1週間にわたる指導等について、同図書館の総力を注いでいただいた。かかる凄まじい営みの詳細を記すためには、ゆうに本稿全部の紙幅を要する。また筆者の力ではどうも正確に表現しえない。それほどに、片山現顧問と同図書館の人々（菊地俊一氏、太田映子氏、中村佐恵子氏、香山正恵氏ほか）の負担された労苦は大きく重いものであった。しかしこの営みは、短大図書館界のみならず図書館界全体にたいして、かつてない規模でのコンピュータ化促進をもたらした。それは、この研修会で学んだ内容に感銘をうけ、これを契機に自館のコンピュータ化を実現したところが100余館にのぼるという事実だけで明白であろう。かかる犠牲的な営みを続けられた片山現顧問にたいしては無論のこと、上記の館員の方々にたいしても、本会として感謝の意を表わさなければ情理にはずれることとなろう。なおこのことについて本会としては、事務局理事の立場から筆者が僅かに関わりもちえたただけであった。

その後1986年（第4回）と1987年（第5回）には、内容を一新して“参考業務と書誌”をテーマに開催した。これらはいずれも最近の活動であり、人々の記憶はまだ鮮明であろう。それだけに詳しい記述は避けるが、その企画・準備・運営などの全般にわたって中心的役割を果たしたのが、小町エミ子現理事（桐朋学園大学短大部図書館）と馬場直子現理事（立教女学院短大図書館）それに網本正巳現理事であった。とりわけ第4回の場合、これまでの研修会とまったく異なる内容のため、これらの人々の企画段階での苦労は少なくなかった。しかも小町・馬場の両氏は、役員になってから日が浅く、本会をリードするには何かと遠慮がのこの状況での重たい任務であった。しかし誠実に努力を重ねられ、実りの多い研修会を実現することができ、参加者からは高い評価をいただいた。

出版活動

1. 『私立短期大学図書館総覧』（1979年4月）

短大図書館の相互協力の便覧として、また各図書館が自館の改善充実をはかる際の参考資料として役立つことを希って、本書は刊行された。刊行経費は約120万円程を要したが、当時の本部の年間予算は20万円程だった。これも広告収入や販売収入でどうにかまかなうことができ、会員館には無料で配布した。本書の編集面で中心的

な役割を果たしたのが、芝原翠現顧問と杉山敏子前幹事であった。実情把握のための調査表の設計から、その配布・回収さらには編集と、全般にわたって責任をとられた。両氏は、本書の続編である『集計分析編』でも編集担当の任に着かれた。当時、芝原氏は手首をいためており、ペンを持つのも不自由だったと記憶している。また杉山氏は、両手の爪が抜け落ちそうなほどに体調が不良だった。このような二人が、自分の業績にはならない仕事にもかかわらず、自館での勤務を人並み以上の密度でこなしたあと、夜更けまで黙々と作業を続けて完成されたのが本書である。このような両氏の尊い苦労が報われ、本書は会員館はもとより図書館界からも好評を博し、本会の以後の活動に自信と弾みを与える記念碑的の事業となった。

2. 『私立短大図書館総覧集計分析編』（1980年10月）

本書は、実態調査資料である前記『総覧』について、統計的手法による分析を加え、短大図書館の抱える問題を明確にすべくまとめられたものである。その作業は、前述の芝原・杉山の両氏とともに網本正巳現理事と筆者が担当した。本書の集計作業は、各館のデータをパンチカード化し、それにより多様な集計を行なう方法を採用した。このパンチカードの作成と集計は網本氏が担当したが、その作業量は膨大で、同氏の奥方にまでご助力を戴くことにより完成した。今にして想えば、本会の発展のかけには、実にさまざまな人々の好意と支えがあった。なお本書もその刊行経費は会費によらず、会員館へは割引価格で、その他は定価で頒布する方法により対処した。

3. 『図書館員になるには（菅原春雄著）』（1982年5月）

4. 『資料組織化の実践（遠藤英三著）』（1983年4月）

5. 『日本十進分類表 新訂7-8版比較表（北九州司書の会編）』（1983年6月）

上記の3冊は、編著者自身が経費の一切を負担して刊行したもので、自費出版に近い。それぞれに時宣を得た内容のもので、本来なら通常のかたちで刊行したかったが、財政にゆとりがないためこのような方法をとった。これらの出版は、本会の貴重な活動実績となり、図書館界からの信頼をたかめることにつながったが、そのかけには編著者の方々のこのような負担が存在したことを忘れてはなるまい。なお『資料組織化の実践』については、著者自身の負担のほか、編集から校正までを担当した太田映子氏（国学院大学栃木学園図書館）の苦労も忘れられない。同氏は本会の役員ではないので、このような苦労を負担される理由はないが、本会の力の乏しさをみかねた片山喜八郎現顧問が内々に依頼されたことを快諾され、惜しみなく助力を傾けて下さったものである。し

かも本書は400ページを超える大冊のため、その仕事量は前述の『短期大学図書館研究』を2・3冊刊行することに匹敵するものであった。同氏の苦勞の大きさが察しられる。なおこれらの書物の経費回収のため、『図書館員……』は印刷元の新日本印刷所が、『資料組織……』は片山現顧問と筆者が、『日本十進……』については編者自身が販売に努力し、所要経費のほぼ全額を回収することができた。ただし、多額の経費を要した『資料組織……』は経費回収に苦勞した。その折に本会の窮状を察して、全体の半分近くを販売し、発送事務までも手がけて下さった片山現顧問ならびに太田映子氏の努力にたいしては、未だに感謝の念を禁じ得ない。また本会の関係者の中では、坂本龍三前理事（北海道武蔵女子短大）と菅原春雄現理事の助力の大きさも忘れることができない。

6. 『言語学・英語学関係基本文献目録』（1987年6月）

本書は、東洋英和女学院短大図書館の館員が、5年余にわたる自己研修の営みのなかで完成したものである。一つの図書館内で、このような地道な自己研修を持続できた例はきわめて稀であり、それだけに他館の館員にとって尊い手本となるものである。しかも内容的には、図書館人が編んだ書誌としては水準を超える優れたものであった。なお本書も、本会の財政が乏しいために、可能な限り経費を抑えながら、その販売収入ですべてをまかなう方法によった。そのために、筆者が多少の助力をしながら、ワープロによる版作りまでを編者に担当してもらい、印刷・製本のみを業者に委ねるかたちをとった。

地区協議会への援助

本部からの援助は、財政的なものと人的なものに分かれる。前者については、創立時から数年間は会費収入総額の3分の1を交付金として支出していた。その後2度ほどの手直しを経て、現在のような会費収入総額の約2分の1を交付金や助成金とするかたちになった。これは、本会の活動の中心はあくまでも地区協議会にあることを、財政的にも明確にするためであった。後者については、めばしいことは余りなく、地区協議会開催の講演会などに、本部役員を講師として派遣したことぐらいである。この任は、森清現名誉会長や片山喜八郎現顧問、および筆者などが数度づつ担当してきた。

図書館関係団体との協力活動

本会は、図書館関係団体と多様な協力活動を行ってきた。まず日本図書館協会との関係では、同協会短大図書館部会との協力がある。同部会は、元来は私立短大図書館の全国組織である本会と、公立短大図書館の全国組織

である公立短大図書館協議会との連絡調整機関として設置された。そのため同部会の運営に責任を持つ幹事は、両協議会から推薦・派遣してきた。そして同部会の会長は、自動的に日本図書館協会の常務理事を兼ねるため、以前には森清現名誉会長が、現在は鈴木英二現会長がその任に着いて尽力されてきた。また同協会の評議員（施設選出）も3名は本会が推薦する仕組みになっているため、様々な方にその任に着いていただいた。このような状況にあるため、同協会主催の「全国図書館大会」には、その都度本会の本部や地区協議会が中心的な役割を果たしてきた。また本会は、日本の短大図書館を代表する全国組織としてIFLA（国際図書館連盟）に加盟しているため、国際的な図書館活動にも協力してきた。そして1986年に開かれたIFLA東京大会では、宮島敬久現監査が中心となって多大の協力活動を行い、大会の成功のために尽力してきた。

おわりに

組織の発展にとって何よりも大切なことは、立派な口舌ではなく、誠実で地道な実践である。何ら自分の業績や評価につながらないことに、黙々と汗を流すことだけが尊い。それだけに、かかる営みは組織の公的記録に登場することなく、歴史の襞の中に埋もれて忘れ去られていく。このような営みの中でも、組織を創りだすときの苦勞には、幾分なりとも救いがある。なぜなら、創りだすことにもなうその華々しさゆえに、関わった人々の存在に光が当たることが少なくないためである。本号の一部に“創設期のおもいで”なる特集が組まれているのがよい例であろう。しかし組織を育てるためには、ひたすら地道な苦勞の持続を求められる。そしてそれは、光が当たることを期待できない営みでもある。誰しもこのような苦勞に関わりたくはない。事実、本会の役員委嘱時には、様々な理由で断られることが屢々あった。しかし、不都合な事情はどの図書館にもある。それを敢えて引き受け、しかも尽力を続けてこられた上記の人々に共通するものは、図書館によせる思いの深さと、人間としてのやさしさであろう。再度くりかえす。かかる人々の存在がなかったなら、本会の今日ではなかったであろう、と。最後に、これらの人々の努力の登あとを、臨場感をともなった風景として記すことを希ったが、いたるところに表現不足の思いがつきまとう。それが、感謝の想いとは逆の結果につながることを懸念している。これはひとえに筆者の筆力不足によるため、決して真意ではないことを申し添え、もって拙文の弁疏としておきたい。

（東京女子大学短期大学部）

地区協議会の10年

〈北海道地区〉

北海道地区協議会の設立については、昭和53年12月に開かれた昭和53年度の北海道地区短期大学図書館協会の総会において決議されていた。その後「規約案」等、設立についての準備をすすめていたが、さる昭和54年4月27日（金）に北海道武蔵女子短大図書館において設立総会を開催した。

「規約案」の逐条審議と一部修正を加えて「規約」を可決。ついで役員を選出を行ない、つぎのように決定した。（敬称略）

会長・坂本龍三（武蔵女短）幹事・宮下誠（岩見沢駒沢）、大山綱夫（北星学園女短）、佐藤文義（小樽女短）、村田時康（北海道自動車）監査・竹田淳照（札幌大谷）、石田公道（静修短大）

また、北海道地区協議会の設立によって、従来まであった前述の北海道地区短期大学図書館協会は、昨年12月におこなわれた決定にしたがって地区協議会に吸収し、発展的に解消された。それだけに今後の地区協議会の活動に大きな期待が寄せられている。

研修会・協議会通信

昭和54年9月21日（北海道会館）に開催された第1回研修会の〈「NDC 新訂8版」セミナー〉は、講師が原編者のもり・きよし先生であったことと、前記の北海道図書館連絡会議加盟の各館の協力と相俟って盛況裡に終わったことは、この種の会合の計画と実施にふなれであった主催者側としては大きなよろこびと収穫であった。

また地区加盟館に対する連絡等のため、小冊子であるが「北海道地区・協議会通信」を発行している。

総会・研修会・会勢一覧（日付順）

昭和53年11月25日現在 会勢 加盟館 11館

〃 53〃 11〃 15 〃 〃 〃 13〃

〃 55〃 8〃 26 〃 55年度研修会開催

講演 北嶋武彦氏「公共および大学・短大図書館におけるレファレンス・サービスの進め方」

昭和56年4月17日 総会開催

〃 56〃 9〃 12〃 56年度研修会

講演 松岡享子氏「いまの子どもたちと図書館」

昭和57年4月23日 総会開催

〃 57〃 6〃 19〃 現在 会勢 加盟館 15館

昭和57年11月20日～21日 「北海道地区における図書館業務に関するコンピュータ実務研修会」

講演 片山喜八郎氏「マイコンと図書館」

実習指導 片山喜八郎氏 渡辺敏一氏

昭和58年1月31日現在 会勢 加盟館 16館

〃 58〃 5〃 13〃 総会開催

〃 58〃 9月21日～22日 58年度研修会開催

講演 石山洋氏「逐次刊行物の諸問題」

〃 59年5月11日 総会開催

〃 59〃 6〃 20〃 「逐次刊行物総合目録'84年版」

刊行（加盟15館所蔵の和雑誌3368種、洋雑誌345種収録）

昭和59年9月20日～21日 59年度研修会開催

講演 前川恒雄氏「図書館発展の基礎」

昭和60年5月10日 総会開催

〃 60〃 7〃 現在 会勢 加盟館 16館

〃 60〃 10月22日～23日 60年度研修会開催

講演 竹内 昶氏「図書館員への期待—ルイス・ショアーズの考え方を中心に一—」

〃 61年10月31日 61年度研修会開催

講演 石井敦氏「今日における図書館史研究の意義」

昭和62年3月 現在 会勢 加盟館 17館

〃 62〃 4月24日 総会開催

〃 62年10月19日～20日 62年度研修会開催

講演 中山素水氏「公共図書館から大学図書館へ望むもの」

昭和63年1月29日現在 会勢 加盟館 18館

（以上〈地区活動報告〉より。文責川井）

〈東北地区〉

中村 泰正

「私立短期大学図書館協議会」の発足と、「東北地区支部協議会」の誕生

戦後の学制改革の中で暫定措置として発足した短期大学であったが、その後、新設置基準が制定され、高等教育機関の中でようやく定着をみたのは昭和35年をむかえてからである。しかしながら短大図書館の内容は重要な教育的機関としては予算・人員・施設等の面で四年制大学とは比較にもならない立場にあり、多くの問題点を抱えていた。

日本図書館協会主催の「全国図書館大会」の分科会においても「大学部会」の一部として存在していたにすぎなかったが、昭和51年度のJLA総会において、「短大図書館部会」として独立分科会として承認された。そして51年11月29日の「51年度JLA全国図書館大会短大図書館部会」において、安部登巳氏（東京女子短大図書館）より「私立短期大学図書館協議会」設立の提案がなされた。全国一致で承認され、「私立短期大学図書館協議会設立発起人会」が発足、52年5月には「私立短大図書館協議会設立の趣旨と活動内容」が具体的な内容をもって発表された。

次いで52年4月18日付で安部登巳氏より「JLA短大私立系幹事」の連絡をもって、東北地区には宮城清先生（仙台白百合短大図書館長）に『発起人として参加いただきたい』との文書が入った。『5月末のJLA部会にあわせて発起人会を開催し、規約（案）や組織結成などについて協議したく、ご意見要望をお願いします』という文書を受けたのが、「東北地区支部」誕生の産声（うぶごえ）であった。そして52年5月27日「私立短期大学図書館全国組織結成発起人会」を開催する旨の案内状が宮城先生の所に届いた。

52年9月29日大阪市の建設保証ビルを会場として、「私立短期大学図書館協議会」創立総会が開催され、役員選出において、会長担当理事4名、地区選出理事7名（北海道・東北・関東甲信越・東海北陸・近畿・中国四国・九州）が承認され、東北地区は宮城清先生が初代理事を担当されることとなった。

- 52・11・12 「東北地区支部」第1回研修会を開催、会場は聖和学園短期大学。会場校の図書館を見学後、宮城理事から「短図協」の発足と位置づけ、今後の歩みについての解説のあと、各館の現状報告、問題点などが提示され、図書館業務の進め方についての話し合いが行なわれた。52年10月現在、加盟館は全国で107館、東北地区支部7館。
- 53・5・19 宮城理事より健康上の理由のため、東北地区理事を続けられないので、中村（山形女子短大）に後任の要請があり、なお、協議会本部にも推薦した旨の連絡があった。
- 53・6・14 協議会本部もり・きよし会長より中村宛、東北地区理事を引きうけるよう要請があり、宮城先生の健康上による辞意堅く翻意を得られないため、中村が後任を担当することとなった。
- 53・10・13 JLA全国図書館大会を機会に青森で「私短図協」の総会が開かれたが、その前日、「東北地区」の第2回研修会を開催、安部登巳常務理事より短

大図書館の今後の動向についてのお話を伺った。加盟館10館中参加7館であった。

- 55・2・29 昭和54年度「東北地区支部」研修会を開催、会場山形女子短大図書館。研修テーマ「目録について」講師 山形県立図書館目録係長鈴木睦子氏
- 55・12・20 昭和55年度「東北地区支部」研修会「短大図書館におけるレファレンスの問題について」発表と話し合い。会場（福島市）桜の聖母短期大学
- 56・1・30 昭和56年度「東北地区支部」研修会「NDC 新版 8版へ移行に伴う諸問題について」会場（秋田市）聖霊女子短期大学
- 57・12・10 昭和57年度「東北地区支部」研修会「図書館の機械化について」講師渡辺敏一氏・屋島正機氏、会場は山形女子短期大学
- 58・11・18 昭和58年度「東北地区支部」研修会「資料分類法について」講師 もり きよし先生 会場は仙台市郵便貯金会館。終了後もり先生歓迎会
- 60・1・19 昭和59年度「東北地区支部」研修会「レファレンス・ワークについて」講師黒田一之先生 会場は仙台市郵便貯金会館。終了後、黒田先生を囲み懇談会。
- 61・2・1 昭和60年度「東北地区支部」研修会。「JLA全国大会（仙台市）「短大図書館部会報告と問題点」について」会場は仙台市郵便貯金会館。
- 62・1・24 昭和61年度「東北地区支部」研修会「短大図書館の利用指導について」（第1回）講師丸本郁子先生。会場は仙台市中央公民館。
- 63・1・30 昭和62年度「東北地区支部」研修会「SUBJECT LIBRARIANをめざして」（第2回）講師は丸本郁子先生。会場は仙台市中央公民館。
(山形女子短期大学)

＜関東甲信越地区＞

- 昭和56, 2, 20 関東甲信越地区協議会会則原案できる
- 3, 17 本部からの引き継ぎ完了
 1. 会報の綴り
 2. 加盟館名簿
 3. 会計帳簿
 4. 関東甲信越地区短大図書館雑誌紀要総目録
- 3, 24 総会(JLA)27校45名 会長選出 高尾清（日本経済短期大学）講演会 森 清「短大図書館図書整理(分類と目録) 雑感」会則施行 会費5000円を地区協議会にて集める事になる。 会勢68校
- 57, 3, 23 総会(JLA)

昭和58, 3, 28	講演会 木寺清一「半世紀の図書館生活」 会勢71校 会費 8000 円になる 総会 (JLA) 28校34名 講演会 北嶋武彦「短期大学図書館における参考業務の在り方」 会勢75校	「コンピュータ導入のメリット, デメリット」 昭和61, 4, 24 総会 (関東学院女子短期大学図書館) 25校30名 見学会: 金沢文庫 会勢82校
59, 3, 26	総会 (JLA) 29校35名 会長選出 上沢田浩 (女子聖学院短大) 講演会 藤川正信「大学図書館の将来—短大図書館の検討すべき事項」 会勢81校	6. 21—22 第2 回合宿研修会 (新潟県柏崎市 蒼海ホテル) 26名 共通テーマ「書誌と利用指導」 講演: 平井紀子 佐藤俊子 (文化女子大学短期大学部) 「書誌作成の実際—文化女子大学短期大学部の雑誌記事索引を例にして」
10, 20	加盟館館員名簿調査票記入依頼	10, 30 国立国会図書館新館見学会
11, 28	総会 (日本私学振興財団) 40校52名 講演会 井上如「文献情報と図書館」	62, 4, 23 総会 (東横学園女子短期大学図書館) 25校25名 見学会: 静嘉堂文庫 会勢86校
60, 6, 26	総会 (JICST) 27校28名 会長選出 毛利和弘 (日本経済短期大学) 見学会: 日本科学技術情報センター 会勢82校	10.19—20 第3 回合宿研修会 (山梨県甲府市 シティプラザ紫玉苑) 共通テーマ「収書に関する諸問題」 31名 (日本経済短期大学)
7, 25	関東甲信越地区協議会会報創刊号刊行	
11. 9—10	第1 回合宿研修会 (栃木県日光 幸の湖荘) 21名 共通テーマ「コンピュータの導入と実務上の諸問題」 講演: 渡辺敏一 (東京女子大学短大部図書館)	

<東海・北陸地区>

木村 一夫

昭和年次	主な事柄	加盟状況	総大会	研修会・会報
S.51年	私立短大図書館の全国組織結成についてJLA 短大会よりアピール。発足を決議			
S.52年	私立短大図書館協議会創立総会	「中部地区」8館 (愛知淑徳, 暁学園, 市邨学園, 大垣女子, 高山短大, 東海学圏, 名短, 瑞穂短大)		
S.53年	「私立短大図書館総覧」刊行	「東海・北陸地区～」と名称変更 金沢女子, 聖徳学園, 中日本, 加盟11館		
S.54年	東海・北陸地区図書館協議会「会報」創刊号発行 5/29 ○加盟校図書館名簿 発送	安城学園, 一宮女子, 金城学園, 仁愛東邦学園, 富山女子, 名古屋女子商科, 中部女子, 北陸学院, 加盟 (現20館)	10/5 総会・講演会・研究会 (大垣女子) 16校29名 図書館利用, 蔵書管理その他	12/13 第1 回研修会 (愛知淑徳) 会報 第1号 5月 " 第2号 11月
S.55年	「私立短期大学図書館総覧・集計・分析編」刊行	柳城女子, 星稜女子, 加盟 (現22館)	11/26 (愛知淑徳) 19校27名 相互利用について	会報 第3号 5月 会報 第4号 11月
S.56年	雑誌目録編集委員会 1回 7/1 2回 9/17 29館の協力を得て, 和文誌1566タイトル, 欧文誌574 タイトルを回収。	正眼短大, 名古屋栄養短大 名古屋聖霊, 山田家政短大 加盟 (現26館)	11/4 (名古屋短大) 図書整理の雑感, 等 16校29名	会報 第5号 5月 々 第6号 7月 々 第7号 12月

昭和年次	主な事柄	加盟状況	総大会	研修会・会報
S. 57年	第1回短期大学図書館全国研修会(東京) 5月19日~20日		8/27(北陸学院短期大学)図書館利用教育について 20校38名	会報 第8号 7月 々 第9号 12月
S. 58年	7月「東海・北陸地区私立短大図書館雑誌目録'82年版」500部発行	愛知学泉, 岐阜医療技術短期大学, 岡崎女子短大, 豊橋短期大学, 加盟(現30館)	8/24(聖徳学園女子短大)スタッフマニュアルについて, 他 20校 31名	8/4~5 全国研修会マイコンの徹底活用 会報 第10号 7月 々 第11号 12月
S. 59年	地区協議会通則 完成	高田短大, 名古屋自由学院短大 加盟(現32館)	9/21(一宮女子短大)コンピュータ導入のメリット, デメリットについて 19校29名	12/17 研修委員会(愛知淑徳一校) 会報 第12号 7月 々 第13号 12月
S. 60年	4/3 ※ 林 勇一先生 逝去 (元愛知淑徳短大事務長)		9/20(東海学園女子短大)図書の選択について 22校38名 ◎次期(61・62年度)会長校は, 大垣女子短期大学に決った。但し2年ごとの持ち回りとなった。	6/18 研修委員会 7/5 々 10/8 々 11/22 北陸部会 研修会(レファレンスサービス) 11/29 東海地区研修会(図書館における文書事務) 会報 第14・15号
S. 61年	4/24 拡大幹事会(大垣女子) 々 研修・会報委員会 10/2 第1回交流会開催(富山)	敦賀女子短期大学 加盟 洗足学園魚津短期大学 々 東海女子短期大学 々 愛知女子短期大学 々 (現36館)	10/2~3(富山女子短大) ・図書館だより作成について ・図書の紛失対策について ・雑誌目録作成について ◎ヘルン文庫見学(富士大学) 20校34名	会報 第16号 7月 11/26 研修会 ・研究図書の蔵書点検 ・プライバシー保護の問題 ◎「中国の図書館事情」(大垣市立図書館)
S. 62年	10/1 第2回交流会開催(大垣) ◎総会にて次期(63~64年度)会長校は, 東海学園女子短大に決定。	江南女子短期大学 加盟 (現37館)	10/1~2(大垣女子短大) ・館員教育について ・オリエンテーションについて ・図書館利用指導について ◎不破の関跡, 関が原古戦場跡, 資料館見学 ○垂井表佐の大鼓踊り観賞	会報 第17号 2月 会報 第18号 7月 11/30 研修会 ・視聴覚資料の利用 ・文献複写の諸問題 ○「情報化社会の中の大学図書館」 (愛知淑徳短大)

(大垣女子短期大学)

<近畿地区>

高浜 洋一

<研修会その他>

<会勢の推移>

昭和52年の発足当初, 近畿地区の加盟館数は27館。

5年後の昭和57年にはほぼ倍の51館。現在は62館に達している。

近畿地区に所在する短期大学図書館は93館であるから, 加盟率は 66.7%ということになる。

この10年間の研修会およびそれに準ずるものを, 日付け順に上げると次のようになる。

この種の研修会あるいは図書館見学会などには, 未加盟館も参加している。

1 53. 3.24 安部豊巳氏「私立短大図書館の利用教育について」

- 2 53.7.28 志保田務氏「NCR新版について」
 3 54.1.27 石塚栄二氏「NDC8版について」
 4 54.7.7 丸本郁子氏「短大図書館の利用教育について」
 5 54.7.7 (実務研修会)逐刊物・寄贈本の取り扱いについて
 6 55.4.2 (研修懇談会)近畿地区短大図書館間の相互利用について
 7 56.3.27 中嶋正夫氏「マイコンと図書館」(講習会)
 8 56.7.30 浅野十糸子氏「NDCの諸問題」
 9 57.4.2 藤井千年氏「中小図書館と整理委託」
 10 57.10.2 河井弘志氏「大学図書館の蔵書構成」
 11 58.4.2 茂幾周治氏「大学図書館の機械化とその問題点」
 12 59.5.19 光斎重治氏「学術情報システムについて」
 13 60.5.11 豊後レイコ氏「ウインチェル女史にみるレファレンス・ワークの本質」
 14 60.11.16 (パネル・ディスカッション) 図書館奉仕
 ①利用者教育 ②レファレンス・サービス
 ③相互協力
 15 61.5.17 渡辺茂男・坂本菊男氏「洋書・洋雑誌の流通および問題点」
 16 61.12.13 谷沢永一氏「これからの書誌」
 17 62.5.16 志保田務氏「NCR1987年版(仮称)における諸問題」
 18 63.1.23 吉田曉史氏「主題目録法の現状」

<雑誌目録の刊行>

近畿地区では早くから、活動の大きな柱として雑誌の総合目録の出版を行って来た。

編集の方針は一貫して、近畿圏所在の全私立短大を対象としている。

(本版)

地区最初の「雑誌目録」である。約1年の編集期間をかけて完成した。

当地区では、後に出る「補遺版」に対してこれを「本版」と呼んでいる。歴史的な出版物である。

『近畿地区私立短期大学雑誌目録』

昭和55年9月1日発行

収録範囲：1980年3月末現在

参加館：57館 収録点数：3173(194p)

(補遺版)

『近畿地区私立短期大学雑誌目録 — 補遺版』

昭和57年3月1日発行

収録範囲：昭和56年7月5日現在

参加館：41館(うち新規3館)

収録点数：1078(52p)(うち新タイトル375)

(1987年版)

「本版」「補遺版」に対する各方面の批評、助言も採り入れ、「学術雑誌総合目録一和文編」が50音順になったのになら、地区の目録も50音順に直すこととした。

『近畿地区私立短期大学雑誌目録 — 1987年版』

昭和62年10月20日発行

収録範囲：昭和61年7月1日現在

参加館：70館 収録点数：5235(345p)

<役員館の推移>

発足時からの役員は次のとおり。

(◎印は会長館 ○印は会計監査館)

昭和53年度 ◎大谷女子短期大学

昭和54～55年度 ◎帝塚山学院短期大学

梅花短期大学

大谷女子短期大学

○大阪女子学園短期大学

昭和56～57年度 ◎平安女学院短期大学

大谷女子短期大学

帝塚山学院短期大学

○京都芸術短期大学

昭和58～59年度 ◎神戸山手女子短期大学

大谷女子短期大学

平安女学院短期大学

○大阪女学院短期大学

昭和60～61年度 ◎帝塚山短期大学

神戸山手女子短期大学

大谷女子短期大学

○奈良佐保女学院短期大学

昭和62年度(留任)◎帝塚山短期大学

神戸山手女子短期大学

大谷女子短期大学

○奈良佐保女学院短期大学

(帝塚山短期大学)

<中国・四国地区>

樋口 日出雄

当地区の10年史には、未だ不明の部分も多いが、将来の補正をまつこととして、思いつくままに筆を運び責めをふさぐことにする。

本協議会(本部)が発行した昭和60年度の『私立短期大学・図書館&館員名簿』によって、当地区の動勢をうかがうと、加盟館の数は23館を数えることができる。ただし未加盟館として7館の名があがっている。

以来、昭和62年度には加盟27館に達して今日に至って

いる。私立短期大学の絶対数が多くない地区にとって、数だけを論じられては迷惑であろうが、ある程度の数があるかないかと何事も始まらないのも事実である。

昭和57年度の地区総会において、当地区の会則制定が発議され、翌年に制定の実現をみた。これに伴い、理事・幹事・会計監査の分担についてもその大綱が立案され了承された。

昭和59年度には当地区の加盟館員名簿が作成され、大いに重宝がられていたが、これが60年度の全国規模の『図書館&館員名簿』に受け継がれたのである。しかしこの冊子で明らかにされたこととして、前述のごとく多くの未加盟館が存在するという事実がある。内訳は岡山県2・山口県4・愛媛県1であった。

役員の担当館が当番県別に巡回する案のメリットはいくつかあろうが、同時に本地区のように図書館の分布が東西南北に広範にわたる地区においては、他館の情報にうとくなる欠点もあろう。岡山～徳島を結ぶ本四架橋が完工した今日、再考の要がありそうである。

総会・研修会の機会に各館を訪れることはできるが、訪れてみると蔵書運用の充実と同時に、外見も立派に仕上がってファッション感覚あふれる図書館も各地にオープンしつつあり、総会・研修会との同時セットということではなく、別途に訪問の必要性も生まれている。

第一線で活躍中の人々の動向に目を配り、視野を広めるのうってつけなのは、何といても国際会議の場であろう。昭和61年度には東京において、IFLAの国際交流の場に出てゆく機会が近年になって身近になったことはよるべし。当地区からもこの会議に参加・発表を申し出た加盟館があって、広く国際間で連携が計られたという情報が寄せられている。

このような国際交流の動きと同時に、国内的な図書館のあいだを結ぶネットワークの強化も新たな課題であり、機械化が計られる際の目標に図書館のオンライン化が考えられる。本地区の研修会でもくりかえし取り上げられて討議された所以である。

筆を擱くにあたり、記念すべき10周年を新たなるスタートとして、本協議会と当地区協議会のますますの発展を期待する次第である。

(梅光女学院短期大学)

<九州地区>

平常三

九州地区協議会の第一歩は昭和52年11月に開催された九州地区第1回研修懇談会に始まる。この会は、私立短期大学図書館協議会常任理事をされていた安部登巳先生が所用で福岡に来られ、その機会に九州地区の加盟館の

方々と懇談したいという御意志を受けて、九州地区選出理事村上博子氏(西南女学院短大)等のお骨折で開催されたものである。

この会が契機となり、翌53年12月に第2回実務研究会が西南女学院短大で開催された。その席上、地区協議会の結成が議題となり、会則案を作成し各館の意見を聴取の上、54年度中に地区協議会を発足することが決議された。この決議を受けて、54年9月理事館より地区協議会会則案が各加盟館に送付され、会則案についての意見・希望の聴取が行われた。

こうした経緯を経て、55年5月7日西南女学院短大で設立総会が開催され、「九州地区私立短期大学図書館協議会」が正式に発足を見るに到った。発足当時の加盟館は27館であったが、その後2館の加盟を加え、現在29館となっている。以下、発足以来今日までの地区協議会の歩みを要約して掲げることとしたい。

- ◇ 55・5・7 設立総会 西南女学院短大
 - 会則の決定 ○会長館に西南女学院短大を選出
 - 各県幹事館の選出
- ◇ 55・10・31～11・1 鹿児島市で全国図書館大会開催
 - 短大分科会で九州地区私立短大より3名が研究発表を行う
- ◇ 57・3・19 総会及び研修会 西南女学院短大
 - 役員改選…九州地区を5地区に区分し輪番制とする。57年度から福岡地区より選出する。
 - 講演「図書館界の動向」安部登巳氏(別府大学図書館長)
- ◇ 57・4・26 総会及び研修会 鹿児島市
 - 国・公・私立大学と開催時期を一緒にし、会議後懇親会を開催 ○会長館交代 福岡女学院短大 ○研修見学 鹿児島女子短大 鹿児島短大図書館
- ◇ 58・4・25 総会及び研修会 北九州市
 - 地区私立短大図書館所蔵雑誌目録の作成方法につき検討
 - 加盟館員名簿作成
- ◇ 59・4・24 総会及び研修会 純心女子短大
 - 研究発表「純心女子短大図書館におけるマイコンによる電算化への準備について」(純心女子短大)
 - 雑誌総合目録は純心女子短大のパソコンを利用して作成することを決定
 - 会長館交代 純心女子短大
- ◇ 59・5 ニュース・レター第1号発行。以後現在まで8号刊行

- ◇60・3 雑誌総合目録刊行
- ◇60・4・23 総会および研修会 宮崎市
- 研究発表「利用を高めるための運営改善と利用教育」西南女学院短大・東筑紫短大
「大学・短期大学図書館で機械化はどのように進んでいるか」鹿児島短大
- ◇61・4・24 総会および研修会 福岡市
- 研究発表「短期大学図書館における利用指導のとりくみ」西南女学院
「NCR本版案について～その動向と問題点」活水女子短大
「コンピュータ導入その後」純心女子短大
 - 会長館交代 鹿児島短大
 - 新規加盟 沖縄女子短大
- ◇62・4・23 総会および研修会 佐賀市
- 講演「短期大学図書館の今後のあり方と問題点—機械化との係り合いにおいて」片山喜八郎氏（国学院栃木短大図書館長）
 - 研究発表「学生の利用の実態について」福岡女子短大 ○新規加盟 西日本短大
 - 協議 地区私立短大図書館所蔵雑誌目録の改訂版を年度内を旨途に刊行する。
- ◇62・8 雑誌総合目録改訂の原稿提出を各館に依頼、現在、純心女子短大で刊行に向け作業を進めて頂いている。
- 付記 63年度総会は4月21日那覇市で開催予定、現在地元当番館・沖縄女子短大を中心に準備を進めている。
- （鹿児島短期大学）

◆◆昭和62年度全国研修会開催◆◆

——日本文学と社会学の書誌について——

期 日 昭和62年11月12日(木)～13日(金)
 会 場 東京 中野サンプラザ 8F
 テーマ 参考業務と書誌
 講 師 北嶋武彦氏 (大正大学教授)
 深井人詩氏 (早稲田大学図書館)
 佐野 真氏 (学習院大学図書館)
 参 加 90名
 主 催 私立短期大学図書館協議会

第1日目吉岡磐彦氏の司会で、まず鈴木英二会長から開会の挨拶があり、続いて講師の先生方による講義が行われた。テーマと内容は下記の通りである。2日目、参加者は用意された書誌を使って実際に演習を行った。その結果の評価とアドバイスは、講師の先生方から各人に郵送されることになっている。

○参考業務と書誌 北嶋武彦氏 (記録小川)

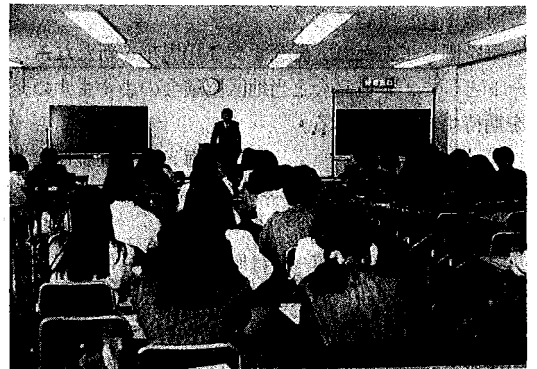
まず、我国における参考業務の歴史について、その戦前のいくつかの例、戦後のめざましい発展についての概

略、そして、参考業務とは「利用者と利用者の必要とする資料を結びつける。」その役割は、化学における『触媒作用』にも似通うと称せられた。書誌については、

- 1) 書誌とは何か
- 2) 書誌の種類
- 3) 参考業務における書誌の役割

以上の順に従った詳細な講義であった。

1) では、西洋のBibliography、日本の書誌学の語



源についてふれ、目録 (Catalog), 文献目録, 索引, 抄録などの各々の相違点等の説明があった。

2) は、様々な書誌の中から、全国書誌、主題書誌、翻訳書誌、解題書誌、総合書誌、選択書誌、人物書誌、叢書・全集集成書誌、書誌の書誌などについて、具体的な例をあげての解説であった。また、これらの書誌が、時代的に収集された「遡及書誌」、最近のもので一定期間収集された「最近書誌」とも云われるその区別、使い方。そして、参考業務におけるこれら書誌の収集の重要性について唱えられた。

3) においては、参考業務を次のように分析された。
①利用案内、②読書相談、③事実調査、④文献探索、⑤書誌サービス。特に⑤においては、図書館員自ら、書誌、索引をつくる姿勢が大切であり、その必要性、作る時の内容と方法など明示された。最後に、レファレンサーはレファレンスコレクションの充実をはかり、書誌類に精通し、仲間との研究の場をもつ等、有能なライブラリアンをめざすべく、出来るところから着実に、無理をしないで、全職員の理解を得ること等、実際に則したお言葉であった。

○日本文学における主要書誌の解題と利用法

深井人詩氏 (記録川井)

書誌とは

文献リスト、文献探索の道具といえるが、本来研究者が、研究の段階で文献をリスト化したもので、過去の研究の結果である。それが文献を探するための道具視され、図書館と本と人 (利用者) を結びつけるツールとなっている。

書誌の利用

このような書誌をいかに利用するか、これまで以上にいかに理解して、手足のように使えるようにするかが、この研修の目的でもある。

演習の方法

あらかじめ演習に適当と考えられるツールを選び、用意してある。どのような方法で実習するか説明する。汎用書誌と日本文学書誌を使い、質問の解答を記入せよ。例「万葉集」の古写本・古注釈書

- 1) 類似主題を選択する
- 2) 選んだ本の筆者または著者名は?
- 3) 選んだ本の所蔵館名は?
- 4) 使用書誌・事典名 (書誌リスト No.14 国書総目録)
- 5) 解答の掲載巻、ページを書く

以上の方法で12問行う。ただし全問答えなければならぬということではない。

まとめ

結局、主題をよく理解することが書誌をよく使うことにつながる。それはよいレファレンスワークが出来ることであり、よい図書館人、よい図書館になる道である。

○短大図書館の参考業務と書誌 (社会学)

佐野 真氏 (記録佐々木)

1. 短大図書館の書誌の所蔵は十分な状態にあるとは言いがたいが、少ない書誌の中で業務を処理していく方法はある。

①所蔵している書誌を十分に使いこなす。

- a. 百科事典の活用
- b. 百科事典、単行書の索引・参考文献の活用。

②自館の所蔵図書・所蔵傾向の把握

③受け入れ予定図書の把握

④世事の情報収集と整理

2. 短大に限らず学生の常として質問内容の焦点が曖昧なケースがよくある。

①問題 (提起されたテーマ) の意味を充分理解していない。

②質問の焦点が漠然としている。

上記の様な場合、提起されたテーマがどういふことなのか、又具体的に何を質問したいのかを、学生との会話の中でしぼり込みながら見つけて行く必要がある。

③同時に同様な質問が出る場合の対応

係員によって解答に大幅な差違のないように図書館内部の連繫をよくしておく。

II 百科事典の活用について

限られた参考図書の中で業務を処理していく方法の一つに百科事典の活用がある。特に社会科学という範囲の場合、百科事典は有用である。

①百科事典の索引から、書名・著者名、関連主題にあたる。

②索引の言葉・同意語・同義語などを網羅する。

③小さなテーマの場合は、百科事典を数種類組み合せて、レポートを書き上げられることもある。

III 社会学の書誌

①書誌ひとつひとつは、現物を見て個人の理解によって使い方を判断すべきである。

②図書館員としては、学生に書誌の案内をする程度には内容を理解しておく必要がある。

③社会学プロバターの書誌の説明。

〔 地区活動報告 〕 — 会報21号以後 —

〈北海道地区〉

当地区では、62年度研修会（兼ねて講演）を10月19日（月）と20日（火）の両日静修短期大学LIM4階研修室で開催した。なお研修会（兼ねて講演）等の要旨は次のとおりである。

〈第1日〉 10月19日（月）

13：00～13：10〈司会〉柴田幹事（札幌大谷短期大学図書館長）〈開会の挨拶〉小林会長（静修短期大学LIM館長兼付属図書館長）

13：10～15：10〈講演〉テーマ「公共図書館から大学図書館に望むもの」そして「北海道の図書館間の相互協力について」〈講師〉北海道立図書館長中山素水氏

15：20～16：30「静修短期大学LIM見学」〈案内者〉

静修短期大学乳井LIM副館長、同溝淵LIM事務長代理〈見学場所〉LIM棟のうち図書館、視聴覚、オーディオコーナー、ビデオコーナーなど。

17：30～19：30「懇親会」〈場所〉北海道会館（札幌市中央区北1条6丁目〈司会〉静修短期大学安斎LIM事務長〈開会の挨拶〉小林会長（静修短期大学LIM館長兼付属図書館長）〈懇親の内容〉各館からのPRや、自己紹介など〈閉会の挨拶〉白佐幹事（北海道女子短期大学付属図書館長）

〈第2日〉 10月20日（火）

9：30～11：00〈司会〉白佐幹事（北海道女子短期大学付属図書館長）テーマ「トータルシステム

会報を編集して10年

菅原 春雄

1987年9月で我が協議会が創立して10周年になった。そこで私に会報編集して10年になるので、何か思い出を書いてほしいとの依頼がありました。さて会報編集して10年、実に早いものですね。何を書きましょうか！

当初私は、編集の知識は皆無であり、何をどうしてやっていいかわかりませんでした。しかし今担当して大変勉強になったと思っております。幸い、わが短大に館長補佐がいて、以前から彼は大学の広報誌「文教大学ジャーナル」を編集担当していたので、会報のレイアウト、題字第1号から教えてもらいました。25字詰×45行サイズの設定などはじめて知りました。最初会報担当は私と館員の青木君でした。私はその当時課長補佐兼図書館学を担当しておりました。その後図書館学専任講師として今日に至っておりますが、まず創刊号は大阪で開催された創立総会記録からスタートしたわけです。創立総会時、私は議長を引き受け、記録は岡野氏（東横短大）よりいただき、また、各地区の活動状況は各地区理事へ依頼し原稿をいただきました。編集に際し、役員等から種々アドバイスもらい、何とか創刊号を1977年12月刊行することができました。ちなみに創刊号内容を紹介しますと第1面にはもり・きよし先生から「協議会発足にあつ

て」と創立総会記録、また企画としてシリーズもの「会員校の声」「短大図書館めぐり」定例として発行ごと地区活動報告、創刊号ゆえに創立までの歩み、担当役員の紹介、1977.12月現在の会員校の紹介等でありました。

号を「フリカエッテ」見ると役員の移り変わり、活動は他の会に見られない自主的活動やその成果が記述されています。また出版物も多く見られます。

発送は最初全国の会員校へ手書きで発送していましたが、その後新日本印刷へ一括依頼することになり、大変楽になりました。印刷は最初大学の関係のところ、朝光印刷というところでやりまして、今日新日本印刷になったわけです。会報は当初から3号雑誌でストップにならないようにとハッパもかけられ、多くのアドバイスも受けました。誤字・脱字もあり、多くの指摘も指導も受けました。担当者も青木君から網本君と一緒に、またひとりとコンビになったり、一人のみの場合と、87年から素敵でベテランの川井女史を迎え、はりあいも出てきました。

いままでご協力いただきました会員校の皆さま、また役員の方には格段のご支援くださりましてありがとうございます。これから先も号を重ねて参りますのでこれまで以上のご協力、ご支援をお願いいたします。

（文教大学女子短期大学）

としての図書館業務の機械化について」〈説明者〉丸善書籍事業部係長竹内氏および同電子計算機事業部係長成田氏

11:00~12:30 テーマ「電子書齋バイブルズと図書館」〈説明者〉紀伊国屋国際情報部係長大本氏

13:30~15:00 テーマ「ニューメディアと図書館活動について」〈説明者〉富士通第3システム総括部文教システム部第2システム課金子氏

15:10~15:25 テーマ「私立短期大学図書館の諸問題について」〈説明者〉小林会長（静修短期大学LIM館長兼付属図書館長）から役員会（10月20日12時から静修短期大学LIM館長室）で協議された3点について提案された。審議の結果提案どおり了承した。

15:25~15:30〈閉会の挨拶〉 蓮池幹事（北星学園女子短期大学図書館長）から2日間のご協力に対するお礼の言葉があり、各自が63年度研修会への参加を約して散会した。

〈東北地区〉

日本図書館協会短期大学図書館部会主催の「図書館利用指導ワークショップ」が仙台にて開催された。会場は尚絅学院短大図書館（陸路順子館長・高橋玲子司書他）が担当されたので、東北地区からは10名参加したが全国から参加希望があり、締め切り期限前に定員を超過して締め切る結果となった。全国的には第5回目の開催であり、東京・大阪・九州・中京（名古屋）の各ブロックに次いで東北地区での開催となった。

講師は大阪女学院大学の丸本郁子教授他、鈴木英二短大部部长などで、有意義なワークショップであった。期間は62年8月27・28両日であった。

ロイ・シェランガスキー福島桜の聖母短大図書館長が、62年12月23日心不全のため急逝され、12月27日学校葬として告別式が行なわれた。米国アイオワ州のご出身で、アメリカカトリック大学大学院（ワシントンDC）をご卒業後、1965年来日、日本の学生指導に努めてこられた。図書館長としては、東北地区協議会の研修会にも参加され、有意義な発言をされた熱心な先生であり、各方面から急逝が惜しまれている。会からは甲電、ご家庭にはお花を贈って御冥福を祈念した。

東北地区図書館協議会の62年度研修会は昨年度研修会の継続として「短大図書館の利用指導」を研修テーマと

して、63年1月30日仙台市中央公民館を会場として実施、講師には前年度同様、丸本郁子教授（大阪女学院大学）をお迎えした。

短大図書館にとって「図書館利用指導」は喫緊の問題となっており、62年度の全国図書館大会（東京）の第10分科会が「小・中・高・大学」を一貫しての「図書館の利用指導」をテーマとして研修討議を行なったことでも分明である。

東北地区の研修会では丸本先生は「SUBJECT LIBRARIANをめざして」を研修目標として目指すことを参加会員一同へメッセージの形で示された。即ち、短期大学の情報センターである図書館に職を奉ずるものは、自分の勤務する短大に開設されている専門科目の情報検索に関しては、プロフェッショナルとしての力を発揮できる研修を身につけておきたい、ということである。

- ①各カリキュラム内教科目に関する文献リストの作成
 - ②各教科、ゼミの授業学習に必要な資料の探し方を学生に指導できる。
 - ③各教員の研究課題に対して、情報検索への協力。
 - ④教員・学生のレファレンス質問に対応できる。
- 今回は上記の②に焦点をしばって実施された。

〈関東・甲信越地区〉

次年度の合宿研修会は「スタッフ・マニュアル作成の諸問題」を共通テーマとして、浜松市館山寺温泉の地にて開催。時期は6月中旬～下旬の平日を予定。

- 幹事会（第4回）昭62・10・19（目白学園）
- 議題：①総会について ②合宿研修会について
- ③その他

- 新加盟館紹介
- 千葉敬愛短期大学図書館
- 大妻女子短期大学図書館

- 会勢88館

〈東海・北陸地区〉

〈新規加盟館の紹介〉

- 江南女子短期大学図書館 昭和62年11月17日現在 37館
- 〈交流会の記録〉 第2回 昭和62年10月1日夜
- 総大会第1日、研究会終了後、参加者一同は、スクールバス等にて大垣駅ビル、「アピオ」5階に移動し、夕方6時より「スベリオール」にて交流会を開催し、次のような意見交換がなされた。

すでに交流会に先立ち、テーマの提出は依頼してあったが、参加19館のうち8館から16項目の質問が提示された。下記は、8項目に要約したものである。

1. 図書館へのコンピュータ・システム導入について
 - すでに導入実施している……………3館
 - 検討中である……………11館
 - まだ問題になっていない……………4館
2. 図書資料の貸出方式について
 - 機械化処理方式の採用……………1館
 - カード記録方式の採用……………10館
 - ブラウン・ニューアーク方式……………7館
3. ブックディテクション・システムの導入について
 - すでにディテクション・システムを採用している……………2館
4. 図書館利用規則、図書館員の指示に従わない利用者に対する措置
 - 罰則を適用し、資料の貸出をしない……………5館
 - 静かに指示し退場させる……………3館
5. 図書館業務のスタッフマニュアル化について
 - 成文化したマニュアルをもとに運営している…3館
6. 寄贈図書で価格が表示されていない図書の取扱いについて
 - 図書館内規で、評価価格の算出方法については定めている……………5館
7. 学科ごとに専門図書の予算をたて執行しているか
 - 専門図書の予算科目に従い、実績をあげている13館
8. 大学職員に採用してから、司書の資格をとることについて
 - 大学側から司書の資格をとらせるようにすすめる……………6館
 - 上記のうち、大学側から資格取得に対し公費補助がある……………2館

以上、懇親会の始まる直前に情報交換がなされ、宴が始まったあとも、各テーブルごとに、またそれぞれ足を運んで各館の情報交換がなされた。今日この頃、流行のカラオケも必要がない程、話に花が咲いたようである。

宴たけなわにして名残りを惜しみつつ、次年度会長校東海学園女子短期大学小形館長の閉会の挨拶により、その幕を閉じた。

<近畿地区>

<新加盟館紹介>

- 大阪短期大学図書館
近畿地区加盟館62館(93館中、66.7%)

<図書館見学会>

京都産業大学図書館

日時：昭和62年12月15日(火) 14:00~16:00

参加者：加盟館 33館 59名

未加盟館 7館 11名

合計 40館 70名

<第18回研修会>

日時：昭和63年1月23日(土) 14:00~16:00

場所：帝塚山短期大学図書館

参加者：加盟館 19館 37名

未加盟館 1館 1名

合計 20館 38名

講演「主題目録の現状」

講師 吉田曉史氏(帝塚山学院大学講師)

<幹事会>

第2回：昭和62年8月1日(土) 13:00~14:00

第3回：昭和62年8月8日(土) 14:00~15:30

第4回：昭和62年10月26日(月) 10:00~12:00

第5回：昭和62年11月27日(金) 18:00~20:00

<雑誌目録改訂版 編集委員会>

第11回：昭和62年8月1日(土) 14:00~19:00

第12回：昭和62年9月19日(土) 14:00~19:00

第13回：昭和62年9月23日(水) 10:00~20:30

第14回：昭和62年10月3日(土) 14:00~19:00

第15回：昭和62年10月4日(日) 14:00~19:00

第16回：昭和62年10月5日(月) 10:00~20:00

第17回：昭和62年10月14日(水) 10:00~20:00

目録完成 昭和62年10月28日(水) 販売開始

<中国・四国地区>

当地区の現有勢力は次の通りであるが、最近の研修会などの大綱をお伝えして地区報告に代えさせて頂く。

60年度総会(今治会場)と同時にセットで研修会がもたれ、協議事項として、

A. 図書館相互ネットワークの促進について

B. 図書館相互協力の具体的方法について

C. 相互協力への準備的な仕事等が協議された

62年度総会(宇部会場)と同時にセットで次の研修会協議事項が予定されている。

A. 図書館機械化の在り方について

B. 生涯教育と図書館

C. 公共図書館との交流について

活発な協議が期待される。

中・四国私立短期大学図書館協議会名簿

1. 鳥取女子短期大学図書館

2. 中国短期大学図書館

3. 美作女子短期大学短期大学部図書館

4. 大下学園女子短期大学図書館
5. 山陽女子短期大学図書館
6. 鈴峯女子短期大学図書館
7. ノートルダム清心女子短期大学図書館
8. 比治山女子短期大学図書館
9. 広島文化女子短期大学図書館
10. 宇部短期大学図書館
11. 梅光女学院大学短期大学部図書館
12. 四国女子大学短期大学部図書館
13. 徳島工業短期大学図書館
14. 四国学院短期大学図書館
15. 瀬戸内短期大学図書館
16. 高松短期大学図書館
17. 愛媛女子短期大学図書館
18. 今治明德短期大学図書館
19. 聖カタリナ女子短期大学図書館
20. 松山商科大学短期大学部図書館
21. 桃山学院短期大学図書館
22. 高知学園短期大学図書館
23. 呉女子短期大学図書館
24. 広島女学院大学短期大学部図書館
25. 萩女子短期大学図書館
26. 東京理科大学山口短期大学図書館
27. 徳山女子短期大学図書館

〈九州地区〉

10年史に付記

帝塚山学院短期大学・帝塚山短期大学両図書館 全面的に相互乗り入れ

両短大はしばしば混同される。しかし全く別の法人が設置する短期大学である。

学院短大は、大阪市内にある学校法人帝塚山学院が設置し、泉州堺にキャンパスを置いており、帝塚山短大は、奈良市に本拠をおく学校法人帝塚山学園の設置する短期大学で、奈良盆地の西端に位置している。

この両短大図書館が本年4月1日から、完全な形で相互に利用し合うことを協定した。

学生は学生証または各自の閲覧券で、教員はそれぞれの身分証明書で、随時相手館の閲覧・帯出その他すべてのサービスを受けることができる、という協定である。

ただし、帯出冊数・期限、コピー料金等は、それぞれサービスを提供する側の制度に従う。期限超過等のトラブルが発生した場合は、両館で連絡をとりあい、利用者の属する図書館が処理にあたることにしている。

両短大は電車で1時間30分程の距離がある。それぞれ堺方面から奈良へ、奈良方面から堺へ通っている学生・教員がいる。

これらの学生・教員は、休暇中などは近い方の図書館を利用すればよいということになる。

別の法人の間でこのような協定が成功するかどうか、実施してみなければ分からない面はあるが、両短大の構成員はこの制度に期待を寄せ、おおいに歓迎している。

——事務局報告——

会勢（63年1月23日現在加盟館）

北海道	18	東北	13
関東甲信越	88	東海北陸	37
近畿	62	中四国	27
九州	29	合計	273 館

新規加盟館

関東甲信越地区

千葉敬愛短大図書館

大妻女子短大部図書館

東海北陸地区

江南女子短大図書館

近畿地区

大阪短大図書館

中四国地区

東京理科大学山口短大図書館

徳山女子短大図書館

萩女子短大図書館

〈近畿地区雑誌目録 改訂版〉完成

近畿地区ではかねてから、雑誌目録改訂版の編集にかかっておりましたが、この程下記のとおり完成、出版致しましたので、大いにご利用下さい。

『近畿地区私立短期大学雑誌目録 — 1987年版』

昭和61年7月1日現在

参加館：70館 収録点数：5235 (345p)

頒価：3,500円

全国の丸善で販売しております。

「短期大学図書館研究 第8号」内容紹介

会議

本部役員会

昭和62年度第3回役員会

昭和62年8月31日(月) 14:00~17:00

日本図書館協会

議題

1. 短期大学図書館全国研修会の件
2. 「短期大学図書館研究」8号の件
3. その他

昭和62年度第4回役員会

昭和62年9月21日(月) 14:00~17:00

日本図書館協会

議題

1. 短期大学図書館全国研修会の件(継続)
2. 「短期大学図書館研究」8号の件(継続)
3. その他

昭和62年度第5回役員会

昭和62年10月26日(月) 13:30~17:00

議題

1. 短期大学図書館全国研修会の件(継続)
2. 「短期大学図書館研究」8号の件(継続)
3. 「会報」22号の件
4. その他

昭和62年度第6回役員会

昭和63年1月23日(土) 13:30~17:00

議題

1. 「短期大学図書館研究」8号の件(継続)
2. 「会報」22号の件
3. その他

編集後記 会報22号をお届け致します。本号は記念特集号として、通常の2倍のページ数を全部依頼原稿で埋めることができました。お忙しい執筆者の方々を急き立て、さぞ御迷惑だったこと、思います。おかげさまで、本協議会を支える加盟館の皆様のご熱意と努力がにじみ出た紙面になったのではないかと自負しております。

ただ、この協議会の歩みに欠かすことのできない初代会長もりきよし先生の玉稿を頂けなかったこと、いかにも残念ですが、先生の御健康の御快復を心よりお祈り申し上げたいと存じます。また、本号の読後の感想はいかががでしょうか、お教え下さい。

(川井)

I 私短図協における研究の歩み~序にかえて

(鈴木 英二)

II 記念特集「短大図書館の10年~教育環境との関連」

1. データにみる短大図書館の変化 (網本 正巳)

2. 短大図書館に於ける主なる変化

短大図書館界のコンピュータ利用~文献にみる

10年の歩み (渡辺 敏一)

短期大学における図書館利用指導

(芝原 翠)

短期大学における図書館の位相(安部 豊巳)

III 一般論稿

北海道における「マイコンによる図書館業務処理」

~主に小樽女子短大図書館の実践例を通して

(新谷 良文)

ワープロによる機能的な受入簿 (宮城 清)

学校教育における利用指導の概況~大学・短大で

の利用指導を目指して (菅原 春雄)

レファレンスブック研究~漢和辞典

(レファレンスブック研究会)

『言語学・英語学関係基本文献目録』の作成

(宮田 伸子)

図書館利用指導の実践~ヘッセル記念図書館の場

合 (尾田真知子)

チベット語図書とその発展~謝佐・マルオサン著

(井上宏二訳)

総合短大図書館における音楽関係資料の整理方法

について~鹿児島短期大学の事例より

(相良 長宣)

IV 昭和62年度短期大学図書館全国研修会報告(第5回)

参考業務と書誌 (北嶋 武彦)

日本文学における主要書誌の解題と利用法

(深井 人詩)

書誌の利用~社会学の場合 (佐野 真)

21号記事訂正

会報21号〔地区活動報告〕〈東北地区〉(P4)の中で“全国図書館協議会短期大学部”とありますのは、“日本図書館協会短期大学図書館部会”の誤りです。お詫びして訂正致します。